

コマンドガールズ *HELL SQUAD*

1985年アメリカ映画

監督・脚本 〓 ケネス・ハートフォード

出演 〓 ベインブリッジ・スコット 〓

グレン・ハートフォード 〓 ティナ・レダーマン



2001年の9・11テロ以来、サミュエル・ハンチントンではないけれども、世界は「文明の対立」に向かって進んでいるような感があります。もちろん、アメリカとしては、対ビンラディン、対イラク政策を「キリスト教対イスラム教」の構図で語られぬよう、最新の注意を払ってはいますが、政権の座にあるエリートたちの建前はともかく、一般的なアメリカの大衆がイスラムをどのように見ているか、それには政治的配慮の少ないB級映画にこそ現れるというのは、私が繰り返しこのコーナーで書いてきたことです。

今回取り上げる「コマンド・ガールズ」は、ラスベガスのショーガールたちが武装して中東に乗り込み大暴れという、粗筋だけですでもB級テイスト漂う珍品です。九人の美女たちが敵のアジトを襲撃し、数十人のアラブ人を皆殺しにする場面なんかあります。製作はキャノンというユダヤ人が経営する怪しげな会社で、それだけにアラブ人への偏見を隠そうともしません。とはいえ、たとえばアーノルド・シュワルツネッガーがジェット戦闘機でビルを占拠したアラブのテロリストを殺戮しまくる映画より、はるかに不快感が少ないのは、いかにもちやちなゲテモノ映画だからでしょうか。

映画の冒頭で、イスラエルに駐在するアメリカ大使の息子がテロリストに誘拐され、アメリカが開発中の中性子爆弾を要求。大使は息子の命には引き換えられないとテロリストの要求を呑む決意を固めますが、大使の片腕で元情報工作員のジャックは、「私におまかせを」とラスベガスに飛ぶ。こんな重大事を貧弱なデスク一つ、いかにも低予算で安スタジオ、大道具小道具ともにケチりましたといわんばかりの内装の大使館の一室で、しかも数秒で決めてしまうんですが、早くグラマーな半裸の姉ちゃんを出せと待っている観客のニーズにぴったりです。

場面はかわってラスベガスのカジノ。ショーガールのリーダーのジャンが、カウンターで酒を呑んでいると、いきなり人相の悪いアジア人が二人よってきて、淫らな行為に及ぼうとする。ジャンはいきなり、一人目のアジア人の腕をねじあげてカウンターに顔面を叩きつけ、もう一人の股間に膝蹴り。立ち直った一人目の鞆丸に、裏掌をかました後で爪先蹴り。「女を弱い性 (weaker sex) だなんて思っちゃだめよ!」とタンカを切る。哀れなこの男たちは、実はジャックが雇った連中で、かつての情報工作員仲間のジャンの腕前が衰えていないかどうか試したのですが、ブロードの美女に叩きのめされるアジア人という構図は、「ピカソトリガー」のそれと同じ差別に基づいていることは言うまでもありません。

で、ジャックの依頼を受けたジャンたちショーガールは、砂漠の真ん中の秘密基地で厳しい軍事訓練を受けます。ノーブラの白いシャツで胸を強調、短いパンツから伸びる長い足、ほとんど

意味不明の水着の水浴シーンと、男性の目を楽しませてくれた挙げ句、いよいよ、中東へ。豪華ホテルの大きなバスタブで泡にまみれる全裸の美女たちに、敵のアジト襲撃命令。赤いベレー帽に半袖のシャツ、黒い短パンに黒ブーツの美女たちは、見張り番一人たてていない敵アジトにやすやすと侵入、トランプやって遊んでいたアラブ兵たちに、へっぴり腰で機関銃を乱射。ついで肉弾戦になり、二度ばかり金蹴りシーンがあつて、ついに敵は全滅。ホテルに帰って入浴していると次の指令が入り、翌日、別の敵キャンプを襲撃、戦車を一台簡単にかっばらつて敵を全滅させ、またホテルに帰って風呂に入っていると電話がかかってくる。指令に従つてまた別の基地を襲撃。ま、この繰り返しが何度か続きます。

やがて本物のテロリストたちがホテルを襲つてきて、ベッドで寝ていた美女たち（当然、下着姿）は無抵抗で連行され、連れてこられた場所が、虎を飼っているアラブの富豪の屋敷。実は大使の息子を誘拐させた真犯人で、下着の美女たちをずらりと壁に鎖で縛りつけ、一人ずつ虎に食わせようとはしますが、間違つて虎の尻尾を踏んでしまい、自分が食われる羽目に。美女たちは大使の息子を無事救出してめでたしめでたし。

とまあ、予算も脚本も演出も貧弱な、美女のカラダだけが売り物の情けない映画です。同じB級美女アクションものでも、最近はやいやアクションが発達し、なかなかのアクションを見せる

ことが多いのですが、この映画の美女たちにそんなものを期待するだけ無駄。「彼女らは最低限でもマーシャルアーツを会得してははずだと思ふだろ？ ノー、彼女らはまさに——いかに女の子らしく闘うんだ！」というのは、ネットで拾ったアメリカ人の感想ですけど、言葉を変えれば、そんなヘナヘナの女の子たちにテもなく殺されてしまうアラブ人たちの惨めさといったらありません。映画の最後、実は彼女らは、大使館に女性に変装して潜入していた敵のスパイの流したニセの情報に基づいて、事件とは無関係のアラブ人たちを殺しまくっていたことが明かされますが、そのことに心を痛める様子は一切ありません。まさか、製作会社がユダヤ系だから、とは思いたくありませんけれど。

結局、あまりにもバカバカしい超低予算クズ映画だからこそ、そういう人種偏見が気にならないのは確かです。そして、美女たちの臆面もない半裸全裸のオンパレードと、アメリカ人がアメリカ人ゆえに抱くことのできるあつかんとした高飛車さが、白色人種の男性の優越感をくすぐり、有色人種の男性のマゾヒズムを刺激するのかもしれない。